

「大学キャンパスを中心とする都心再生構想に関する調査研究」(その2)

—早稲田ユニバーサル・キャンパス構想—

正会員 ○ 山田和義※1
同 増田幸宏※2
同 高橋信之※3
名誉会員 尾島俊雄※4

緑 人 情報 エネルギー キャンパス

1. はじめに

(その1)をうけて本研究では早稲田ユニバーサル・キャンパス構想が実現することによってそこには4つの新たな繋がりができることを提案する。

2. 実現に向けての4つの提案

人、自然、情報、エネルギーという4つの要素のネットワークを確立し、これらを早稲田ユニバーサル・キャンパス構想の軸とする提案である。

2-1 「人の道」

「まち」は人が集まって初めて「まち」と呼べる。その「人の集まりと流れ」を早稲田大学の周辺地域においてより活性化させるというものである。具体的には、早稲田大学内の他学部間交流を更に活性化させるということや早稲田大学が現在まで基本的な考えとしてきた「門と塀のないキャンパス」という理念を下に大学と地域との関係をより密接なものにするということである。特に他学部間の交流をより多様化させることによってさらに新しいコミュニティがそこに生まれるはずである。

2-2 「緑の道」

この地域にある緑地はそれぞれが点在している。そのいい例が戸山公園であり、この公園は明治通りを挟んで東西に分断されていて、全体的にその形が歪である。これらのバラバラになっている緑地を大きなまとまりとして繋ぐことができれば、緑地の機能がさらに引き出せる。その機能とは、たくさんの人が集い、憩う場所としての緑地。災害時の広域避難地場所としての緑地。都市の熱環境を改善してくれる機能としての緑地。そして、地域のアイデンティティ的な役割も果たす都市景観的な機能としての緑地である。

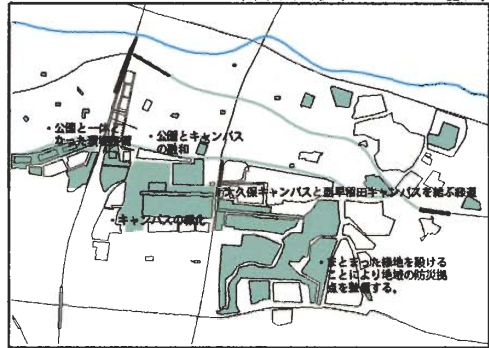


図1 緑の道

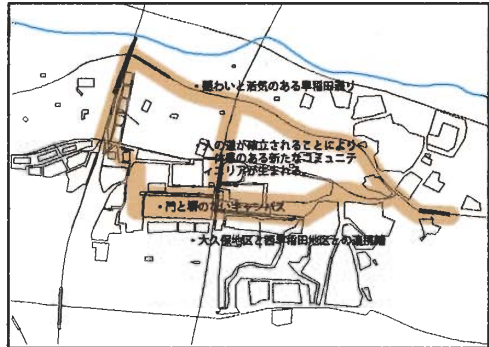


図2 人の道

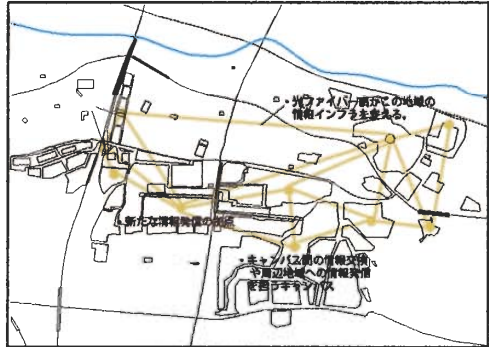


図3 情報の道

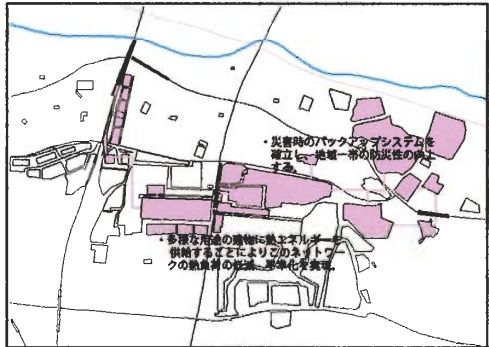


図4 エネルギーの道

2-3 「情報の道」

これは「人の道」と密接な関係にある。人と人との交流によりそこには、情報が生まれ、情報が流れる。特に大学という知を創造する場所においては、おびただしい程の情報が生まれ、流れている。これらの膨大な量の情報をいかに速く正しく伝えるかということがIT革命に象徴されるように現代社会において問題となっている。そこで、最先端の研究を扱うという意味での大学キャンパス間とその周辺地域における情報インフラストラクチャーの整備は非常に意味のある提案であると考えられる。

2-4 「エネルギーの道」

地域のエネルギー利用をより無駄なく効率化するための提案である。具体的には大学を中心とした施設からこの地域一帯にエネルギーの供給をできるインフラストラクチャーを整備するということであるが、これは平常時のエネルギー利用効率化のためだけでなく、災害時などの非常時用においても、少なくともこの地域一帯だけはバックアップによってエネルギーの供給ができるようなシステムを確立するべきである。これにより、「緑の道」と合わせて災害時の広域避難地域として周辺地域にも貢献する。

3. 具体的手法の考察

本章では、それに向けての具体的手法のひとつとしてのキャンパスやその周辺施設の超高層化、集約化について考察する。

早稲田ユニバーサル・キャンパス構想は大学だけを視野に入れたまちづくり構想ではなく、その周辺地域とともにまちづくりを進めようとするスタンスであるから、キャンパスの超高層化は大学自身だけでなく、地域の環境改善に貢献するものとならなければならないということである。それは、先に提案したように「人の道」、「緑の道」、「情報の道」、「エネルギーの道」の4つの繋がりが達成されるひとつの仕掛けになるのではないだろうか。

ここで、キャンパスやその周辺施設の超高層化、集約化が「4つの道」を実現する1つの手法としてどのように貢献するか考察してする。

第一には、バラバラに点在している緑地を大きな

緑地として確保し、まとめることができる。これは、新宿御苑に匹敵する広さの緑地である。これにより第2章で述べた「緑の道」に期待される機能や効果が達成される。そして、できた広大な緑地は人々が安心できる空間であり、そこに人が集い、生活するというようにコミュニティ、つまり「人の道」ができるきっかけになるのではないだろうか。

先にも述べたように「人の道」と「情報の道」とは密接な関係にあり、同時に「情報の道」の確立のきっかけをつくることになる。

「エネルギーの道」については、キャンパスやその周辺施設が超高層化、集約化されることによってそのエネルギーインフラストラクチャーを整備しやすくなるメリットがある。つまり、地域の土地利用がメリハリを持つことによってインフラストラクチャー計画がしやすくなるということである。

4. 今後の展望

現在、都心においてマンションやオフィスビルの超高層化が盛んに行われている。これらは都市空間の高度利用化や都市再生の名の下に行われているだけでなく、やはりそこには経済原理に則った採算性に重きを置いて開発されているように思われる。

本研究の対象地域である早稲田大学キャンパスも都心に位置し、キャンパスの将来構想の下に地域一帯の整備が進むとすれば、都心再生の一役を担う可能性も十分に考えられる。しかしここで考察したキャンパスや周辺地域の超高層化、集約化は現在都心で行われている都市開発とは少しその持つ意味が異なる。繰り返しになるが、早稲田ユニバーサル・キャンパス構想は大学だけを視野に入れたまちづくり構想ではなく、その周辺地域とともにまちづくりを進めようとするスタンスである。キャンパスの超高層化は大学自身だけでなく、地域の環境改善に貢献するものとならなければならない。

都心におけるビルの超高層化が進んでいるが、都市における建物の高層化は本研究で提案した4つの要素が合わさって初めて意味のあるものになるのではないだろうか。

※1 早稲田大学大学院理工学研究科・修士課程

※2 早稲田大学大学院理工学研究科・修士課程

※3 早稲田大学理工学総合研究センター教授・工博

※4 早稲田大学理工学部建築学科教授・工博

Science and Engineering Dept., Graduate School, Waseda Univ.

Science and Engineering Dept., Graduate School, Waseda Univ.

Pof., Advanced Research Center, Waseda Univ. Dr. Eng.

Pof., Science and Engineering Dept., Waseda Univ. Dr. Eng.